日本ブルーノ・ワルター協会会報　第7号

1973年11月

〒166

[redacted]

編集発行人　菅　一

「パリに於けるブルーノ・ワルター」

（西宮市）[redacted]

戦前の古い雑誌を読んでいたところ、パリでのワルターの演奏活動のことが詳しく書かれているのが目につきましたので、筆をとって見ました。すでに会員の皆様は御存じのことかも知れませんが、少しでも参考になれば幸いと思います。

雑誌というのは、「レコード音楽」という戦前のファンにはなつかしいもので、その昭和十四年（一九三九年）一月号に「仏蘭西人ブルーノ・ワルター」という題で、松本太郎氏が書かれているものです。松本氏は非常なフランス楽界通で、当時毎月フランス楽界サ・エ・ラ」という題で連載されていました。

「ブルーノ・ワルターが仏蘭西に帰化した」

此の報導を筆者は十月（註一九三八年）の仏蘭西音楽雑誌で先ず目にした。其後日本の雑誌で、独墺合併の結果ユダヤ人である彼はウィーン・フィルハーモニーとオペラの指揮者の位置を放棄し、国籍を離脱して仏蘭西に行っていた事、九月十八日付で仏蘭西に国籍を得た事などを知った。」という文章で始まります。

ワルターが何年頃から巴里で演奏活動を始めたかは、はっきりしないのですが、松本氏の資料で発見されるものでは、一九二八年五月のものが最初であります。

一九二八年五月十九日　於ブレイエル楽堂　パリ音楽院管弦楽団

ベルリオーズ　「ベンヴェヌート・チェリーニ」（序曲？）

マーラー　交響曲第四番

（ソプラノ独唱　デタンヂュ夫人）

ストラヴィンスキー　ピアノと管楽器の為の協奏曲

（ピアノ　ストラヴィンスキー）

ウェーバー　歌劇「オベロン」序曲

ワルターとストラヴィンスキーの組合せは大変珍しく、興味をひかれます。（編集子註　会報第六号十四頁を御参照下さい。）

五月二十五日から六月二十二日まで。

モーツァルト・オペラ・チクルス　於シャンゼリゼ劇場

管弦楽　パリ音楽院管弦楽団

合唱　パリ・ロシア・オペラ一座

歌手　スタビーレ、フリーダ・ライダー、ロッテ・シェーネ、キプニス、リッテル＝シャンピ、サラー・フィッシャー、ジョージ・ミーダー、ルネ・メゾン等。

「ドン・ジョヴァンニ」（イタリー語）

「コジ・ファン・トゥッテ」（イタリー語）

「魔笛」（ドイツ語）

「後宮よりの逃走」（フランス語）

「フィガロの結婚」（フランス語）

以上のオペラは、各々三回上演され大変好評であった様です。又レコードに残っているパリ・モーツァルト記念祭管弦楽団の実体がパリ音楽院のものであった事が推察されます。（編集子註。私達も同様の見解を持って居ります。BWS一〇〇六のワルターとパリ音楽院管弦楽団の協演の録音資料の中に、モーツァルト記念祭管弦楽団との協演に依る、モーツァルトの歌劇「魔笛」序曲が加えられたのは、其の理由に拠るものです。）

次いで、一九三〇年三月には、ワルター指揮パリ音楽院管弦楽団のベートーヴェン・チクルスの三回の演奏会が行われました。

「第　一　回」

「エグモント」序曲

交響曲　第六番　「田園」

交響曲　第三番　「英雄」

「第　二　回」

「コリオラン」序曲

交響曲　第五番　「運命」

ピアノ協奏曲　第五番「皇帝」（ピアノ　W・ギーゼキング）

「レオノーレ」序曲　第三番

「第　三　回」

交響曲　第八番

交響曲第九番「合唱」（合唱団はウラソフ・ロシア合唱団、独唱者は不明）

これらの演奏会も大好評で、特に第五は大喝采を博したと報じられています。「皇帝」も、レコードが初顔合せではなく、この年にもギーゼキングが協演しているところから、二人が何か不仲であった様な話も疑わしいと思います。

又、第三回演奏会の翌日から二日間、ビガル劇場でヨハン・シュトラウスの歌劇「蝙蝠」を上演したと報じられています。歌手は、ロッテ・シェーネ、ロゼッテ・アンダイの人達です。この上演も大変好評で、魔の棒と賞讃されました。

一九三一年五月には、ライプチッヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と共にパリを訪れ二回の演奏会を開きました。

「第　一　回」

ウェーバー　「オイリアンテ」序曲

シューベルト　交響曲第八番「未完成」

モーツァルト　ピアノ協奏曲イ長調（ピアノ　ワルター）

ベートーヴェン　交響曲第五番「運命」

「第　二　回」

メンデルスゾーン　「真夏の夜の夢」序曲

モーツァルト　交響曲　ト短調

R・シュトラウス　「ドン・ファン」

ワーグナー　「ジーグフリート牧歌」

「タンホイザー」　バッカナール

「名歌手」　序曲

ワルターのイ長調協奏曲（多分K・488）などはきいて見たいものです。

次いで一九三一年十月には、パリ音楽院管弦楽団を指揮して、演奏回を二回開催しています。

「第　一　回」　ベートーヴェン特集

「コリオラン」　序曲
交響曲　第三番　「英雄」
交響曲　第五番　「運命」

「第　二　回」

ヘンデル　　コンチェルト・グロッソ　（ピアノ　ワルター）
モーツァルト　交響曲　ト短調
ベルリオーズ　「幻想」交響曲

此の後ワルターはウィーンで活躍する様になるのは御承知の通りですが、このウィーン・フィルと共に、二年にわたってパリを訪れています。

その第一回は、一九三四年四月に行なわれました。曲目は、

ウェーバー　　「オベロン」序曲
モーツァルト　交響曲　変ホ長調
ワーグナー　　「タンホイザー」　バッカナール
ブラームス　　交響曲　第二番

第二回は、一九三五年四月で、

ハイドン　　交響曲　変ロ長調
モーツァルト　ピアノ協奏曲　ニ短調　（ピアノ　ワルター）
ラヴェル　　クープランの墓
ベートーヴェン　交響曲　第七番

が演奏されました。

一九三五年後半には、パリ・フィルハーモニー協会管弦楽団を使って、二回演奏会を開きました。

「第一回　モーツァルト祭」

嬉遊曲　変ロ長調　K二八七
交響曲　第三十五番　「ハフナー」
二つのメヌエットと三つのドイツ舞曲　K五六八、K五九九
交響曲　変ホ長調　K五四三

「第　二　回」

ボール・デュカ　交響曲
ベートーヴェン　交響曲　第三番　「英雄」
「レオノーレ」序曲　第三番

一九三六年五月から六月にかけてザルツブルク音楽祭の歌手を指揮して、

モーツァルト　　「ドン・ジョヴァンニ」
ベートーヴェン　「フィデリオ」

が上演されました。「ドン・ジョヴァンニ」は三回、「フィデリオ」は一回上演されました。主な歌手は、ロッテ・シェーネ、ロッテ・レーマン、メルヒオール、フランツ・フェルカー、エッィオ・ピンツァ等に、パリ・オペラのフェルマンティが加入しました。

更に、この年の六月下旬、パリ大博覧会出演の為、ウィーン・フィルハアモニーを引きつれて、シャンゼリゼ劇場で二回演奏会を開きました。

「第　一　回」

ハイドン　　交響曲　第一三番　ニ長調
マーラー　　歌曲　（ソプラノ　エリザベート・シューマン）
シューベルト　交響曲　第九番　ハ長調

「第二回」（ウィーン・オペラ合唱団出演）

バレストリーナ　スタバート・マーテル
モーツァルト　　レクィエム
ブルックナー　　テ・デウム

独唱者　エリザベート・シューマン、エニード・サント、
　　デルモタ、キブニス。

一九三六年十一月には、パリ・フィルハーモニー協会管弦楽団と一回演奏会を開きましたが（オーケストラ人員百名）、その前日に「音楽の道徳的な力」という題で講演会を開いています。

モーツァルト　交響曲　ニ長調
ブラームス　　交響曲　第四番
ワーグナー　　「ジーグフリート牧歌」
ベルリオーズ　「ベンヴェヌート・チェリーニ」序曲

次いで、一九三七年五月にはモーツァルト祭として、二回（同曲目）演奏会を開いています。管弦楽団は前回と同じです。曲目は、

嬉遊曲　K二八七
小夜曲　K五二五（アイネ・クライネ・ナハトムジーク）
交響曲　第四〇番　ト短調
ピアノ協奏曲　イ長調　（ピアノ　ブルーノ・ワルター）

K二八七のディヴェルティメントをワルターは好んでいるらしく、何度も演奏しています。しかし、レコードではきけないことは残念です。

ワルターのフランス帰化までの活動は以上の通りですが、帰化後のものとしては、次の様な演奏会が催されたことが報じられています。

一九三八年十月十日には、ジャック・ティボーとのジョイント・リサイタルが開かれ、

モーツァルト　ソナタ　ヘ長調　K三七六
ベートーヴェン　ソナタ　ハ短調
フランク　　ソナタ　イ長調

の三曲が演奏されました。ヴァイオリンのティボーとの共演、こんな豪華な組合せの演奏が、はかなく空気中に消えてしまったとは全く惜しい気がします。

管弦楽演奏会としては、同年十月十二日と十三日に、パリ音楽院管弦楽団と、ブレイエル楽堂で共演しています。曲目は、

モーツァルト　交響曲　第四十一番
ヴェルディ　　レクィエム
　　独唱者　ジェルメーヌ・オルネル（パリ・オペラ）、エニード・サント（ウィーン・オペラ）、ジュアット、サンゲル（いずれもパリ・オペラ）。
　　合唱団を合せて二五〇人。

以上が一九三八年十月までの、パリでの演奏活動です。しかし悲しいことに、フランス人ワルターも僅か一年程で、ナチスの急迫を逃れて、アメリカに安住の地を求める事になるのです。

「ワルターの演奏会記録」

◎　スイス・ロマンド管弦楽団
　　（於ジュネーヴ国際連盟大講堂）

一九三八年九月九日（金）午後八時四十五分

ベートーヴェン　レオノーレ　序曲　第三番
同　　交響曲　第一番　ハ長調
同　　交響曲　第三番　変ホ長調　「英雄」

此の演奏会には、オペラの権威福原信夫氏の父上がおいでになったのですが、宇野功芳氏の「ブルーノ・ワルター」をお読みになった福原氏が感激なさって、プログラムを宇野氏に贈られました。協

会としては、それを宇野氏から拝借致しました。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

◎ニューヨーク・フィルハーモニック管弦楽団

一九四一年二月二日（日曜日午後）カーネギー・ホール

シベリウス　「トゥオネラの白鳥」

シューマン　交響曲　第三番　変ホ長調　「ライン」

メンデルスゾーン　V協奏曲　ホ短調（独奏　ヨーゼフ・シゲティ）

コーンゴールド　シェークスピアの「M u ch　ado　about　uothing」の附帯音楽組曲

一九四一年二月六日（午後八時四十五分）（木）　同ホール

及び二月七日（午後二時三十分）（金）

ブロッホ　「招魂曲」（ニューヨーク初演）

モーツァルト　交響曲　第四十番　ト短調　K・五五〇

シューマン　P協奏曲　イ短調（独奏　ヨーゼフ・ホフマン）

R・シュトラウス　交響詩「死と変容」

一九四一年二月八日（土）午後八時四十五分　同ホール

ブロッホ　「招魂曲」

モーツァルト　交響曲　第四十番　ト短調　K・五五〇

R・シュトラウス　「ドン・キホーテ」

（チェロ独奏　ジョゼフ・シャスター）

（ヴィオラ独奏　ゾルタン・カーティ）

一九四一年二月九日（日）午後三時　同ホール

ウェーバー　歌劇「オベロン」序曲

モーツァルト　交響曲　第四十番　ト短調　K・五五〇

R・シュトラウス　「ドン・キホーテ」

（チェロ・ヴィオラ奏者は右に同じ）

R・シュトラウス　交響曲「死と変容」

右の資料は、三浦淳史氏が宇野功芳氏に贈られたプログラムを、宇野氏が協会に貸して下さったので、会員諸兄に御提供申上げる事が出来ました。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

◎ロンドン・フィルハーモニック管弦楽団

一九四七年十月三十日　（ロイアル・アルバート・ホール）

ベートーヴェン　交響曲　第一番　ハ長調

同　同　第八番　ヘ長調

同　同　第五番　ハ短調

一九四七年十一月六日　（同ホール）

シューベルト　交響曲　第八番　ロ短調　「未完成」

ブラームス　ハイドンの主題による変奏曲

マーラー　交響曲　第一番　ニ長調

一九四七年十一月九日　（コヴェント・ガーデン）

メンデルスゾーン　「真夏の夜の夢」序曲

ハイドン　交響曲　第百二番　変ロ長調

モーツァルト　アイネ・クライネ・ナハトムジーク

ドヴォルザーク　交響曲　第四（八）番　ト長調

一九四七年十一月十三日（ロイアル・アルバート・ホール）

ブルックナー　「テ・デウム」

ベートーヴェン　交響曲　第九番　ニ短調

イゾベル・ベイリー（S）、キャスリーン・フェリアー（a）、ヘドル・ナッシュ（t）、ウィリアム・パーソンズ（b）、ロンドン・フィルハーモニー合唱団（合唱指揮　F・ジャクソン）

◎B・B・C　交響楽団

一九四九年十月一日　（ロイアル・アルバート・ホール）

ベートーヴェン　「プロメトイスの創造物」序曲

マーラー　亡き児を偲ぶ歌

同　交響曲　第二番　「復活」

（キャスリーン・フェリアー、ドーラ・ヴァン・ドールン、BBC合唱協会、合唱指揮レスリー・ウッドゲイト、オルガン　アーノルド・グレア）

一九五五年五月二十五日　（同ホール）

ブラームス　ハイドンの主題による変奏曲

同　「運命の歌」（BBC合唱協会、合唱指揮レスリー・ウッドゲイト）

ブルックナー　交響曲　第九番　ニ短調

一九五五年五月二十九日　（ロイアル・アルバート・ホール）

ハイドン　交響曲　第九十六番　「奇蹟」

モーツァルト　「人間となり給う」（ミサハ短調より）

マーラー　歌曲　（管弦楽伴奏）

モーツァルト　レクィエム　K六二六

イルムガルト・ゼーフリート、ノルマ・プロクター、リヒャルト・レヴィス、マリアン・ノヴァコフスキー、BBC合唱団。

以上の戦後のワルターのイギリスに於ける活動の資料を御提供下さったのは、京都府御在住の音楽愛好家[redacted]氏で、氏は蒐集活動の間に、この様な素晴らしい資料を入手なさったのです。

ブルーノ・ワルター

バーナード・ガヴォティ

私は今、ブルーノ・ワルターが指揮をした数多くの演奏会の中、或る一つの演奏会の事を思い出して居る。それは、一九五五年五月に、パリで行われたのである。七十九才という高齢にも不拘、この巨匠は疲労の痕跡をも見せなかった。しっかりと根を張った樫の木の様に力強く、「精密」と「新鮮」と「生気」とをほとばしらせ、全ての細部には注意が行届いていた。素晴らしいフランス国立放送管弦楽団との協演により、「ブラームス交響曲」を、一音一音、私達の為に繰拡げるのであった。新しい聞き馴れない音は無い。とは言っても、聞き飽きた音の羅列ではなかった。と言うのは、ブルーノ・ワルターが私達に与えて呉れたものは、まるで、「その曲を初めて聴く様な感じ」だったからである。

真剣に考察した結果、私が認識したのは、彼の演奏様式は、全く単純で、説明し難いものだと言う事であった。その秘密は、地球上の全ての美しい事柄のそれの様に、貴方には捕捉する事は出来ない。たゞ、貴方にその映像を残すのみである。私が、彼の演奏というものは、分析と綜合を同時に行う事だと言ったとしても、それだけでは、たゞ其の表面を撫でる事にしかならない。事実、極く些細な細部に対してでも、彼の注ぐ注意は無限なのである。然し、彼は直ちにそれを完全に明快な、全体の構想の中に取り入れて了うのである。彼の身振りは、簡潔で而も控え目であり乍ら、敢えて言えば、否も応も言えない程、雄弁で、且つ神秘に満ちているのである。

彼の、オーケストラの把握は、まさに絶対的であり、時には完全に彼は動きを見せなくなる。或るアンダンテの楽節で、腕を半ば曲げたまま立って居る彼の姿が、私の瞼に浮んで来るのである。微笑を浮べる程落着いて居て、二つの凹面鏡の様に、曲線を描いた両腕を開いて（と、私には見えた）居る間、オーケストラの楽員は、或るイメージと或る観念の表出を読み取る事が出来たのである。巨匠自身に就いて言えば、嵓の様な不動の姿勢の中に、「私はじっと見守るだけですよ。それで全ては上手く運ぶのです。若しも私が干渉すれば、驚嘆すべき瞬間を損って了うだけなのです。だから、私は干渉しません。」とでも言って居る様に見えた。夜空に輝く星の下に、静かに浮んでいる船の船首に立った船長ブルーノ・ワルターが、「指導者の仕事というものは、或る時には指揮をしないでおくという事もあるのです。」と、説明をして居る様に思われた。活潑な最終楽章では、用心深く成りこそすれ、決して昂奮を見せなかった。彼の左手は、楽句に適切な色彩を与える為、または音の響の激発を柔らげる為に、時々加わるだけであった。そうして、指揮棒は、ずっと規則正しく、またはっきりとして解り易い拍子（全員の拍子であり、またそれ以上に作曲家の拍子）を取り続けていた。〃明澄〃の拍子を抑える奇蹟は起きなかったし、〃美〃の道を通って「真実」へと導いてゆく拍子を抑える要求も無かった。それは全くその通りで、それ以外の方法はあり得なかったのである。これこそは、本質的に全く一致している点で、否定出来ない完璧性であり、この完璧性は決して冷たいそれではなく、愛情の熱によって暖められたものなのであった。ブルーノ・ワルターの姿を見守って居るうちに、私は偉大な芸術家と言うものの「定義」を求める努力をして居た。彼こそは、より以上に愛する人なのではないだろうか？　戦によって心が弱くなる事は決してないのだけれども、一日の終りには、美に触れる事によって元気づけられ、また永遠のおののきを感じる事を望む魂の持主なのではないだろうか？

演奏が終った時、ワルターはゆっくりとこちらを向いて頭を下げた。この文章を書きながらも、私は今でも、あの説明し難いうるおいと博愛主義に満ちて、弧を描いた眉の下に輝く、くぼんだ真剣な眼を思い浮べる事が出来るのである。そこに、友人に秘密をのぞかした偉大な芸術家の視線を感じさせるものがあったのである。彼は私達を眺めて居た。然し、実際に彼が見て居たのは、彼自身であり、また見馴れない人達の顔の上に映し出された彼自身の魂なのであったのである。照明を浴びる彼を見て、私も亦輝く彼の唇に、声にならない言葉を読み取る事が出来たのである。「人々よ。同胞よ。兄弟よ。私が現在の私に成る以前は、私だって貴方達と同じだったのです。つまり、今日の様に、貴方達の喝采を受けるに価いする様になる前は、私も多くの他の人達に拍手を浴せたものです。そうして、若しも私が、嵐の様な貴方達の「ブラヴォー」の声を受けながらも憂鬱そうに見えるとすれば、それは或る悲しみが、以前から私を虚栄心から何時も守って呉れているからなのです。

＊　＊　＊　＊　＊

「神よ、我が絶望を守り賜わん事を。」まるでロケットの様に神の御許へ舞上って行く、此の祈りの言葉は、ブルーノ・ワルター自身のペン先から生れ出るのである。その言葉は、彼が絶望の中でもがく事自体を楽しんで居る事を意味しているのでは、決してない。そういう事ではなく、彼は、低級で下品なもの全てをひどく嫌い、また、「凡庸」に慣れて了う事を強固に拒否するのである。ゲーテの言葉を借りれば「決然と生きる」とでも言おうか、危険を冒して

生きる。そうして、決して習慣に身を委せる事は無いのである。これこそは、彼の人生の「モットー」なのである。

（中　略）

＊　＊　＊　＊　＊

ブルーノ・ワルターが規範としたものは、たゞ単に音楽的なものだけではないのである。それは別のものであり、また次元の高い種類のものである。つまり、確固とした道徳意識という規範なのである。彼の音楽に対する考え方は、彼の人生観と完全に混り合っている。その結合が、彼の「才能」を物語るものではなくて、彼自身の芸術に対する彼の態度を説明するものなのである。彼が指揮台へ上る時、私は彼の過去に思いを馳せ、大メダルの浮彫の様に感銘の深い彼の言葉を、私自身に繰返して聞かせるのである。また、私は記憶して居る。尊敬の念を籠めて、神経を集中させて居るオーケストラに向って、指揮棒を構えて居るあの人を。その人こそ、音楽を理想の王国からやって来た使者だと考えて居る人である事を。ワーグナーに次いで、彼は彼自身の為に、芸術の福音と人間の精神的交渉とを成就して来たのである。「私には、愛情の無い音楽の天才というものは考えられない。」し、私は、聴衆の中に居て「善なる天性のおののき」と彼が呼んだものを感じる事が出来るのである。彼と共にモーツァルトを思い、「彼の平凡な現実生活と、高貴な創造活動の世界の間」のギャップを埋めるものを、空しく追い求めるのである。そうして、その様な二元性から、平凡な悶えを抱いた事のある神の様なモーツァルトの秘密を、どの様にして霊感に満ちたその人が、一語一語、翻訳するのか、私には理解出来るのである。それで、「氷の様に冷たい疑惑の風が、私の心の中を吹きまくり、それで私の心は遅かれ早かれ風邪を引き、決してよくならなかった。」のである。「人生の荒波を切抜けるのに役に立った」ユーモアを解する心という、彼のデリケートな感受性を守る有難い武器を、私は認識出来るのである。

彼がこちらを向いてお辞儀をし、私達をじっと見つめる時、彼の両眼に宿る思いやりのある一対の希望と疑惑の炎を見つめる時、私は好きなのである。彼の眼ざしは、その様な豊富な体験を反映した、深みのあるものである。「完全とは目標なのです。人は誰でもそれを追い求める事は許されても、そこに到達する事は出来ないのです。」と、その眼は語るのである。その目標に到達する瞬間でも彼はまだ追求し続けるのだと考えるのである。その様な人こそブルーノ・ワルターであると、私には思われるのである。一人の人間としての彼を描出する為に、指揮者としての彼を描写する意図を放棄した事をお許し戴きたい。

ワルターも生身（なまみ）の人間

（仙台市）　[redacted]

最近の話である。

私は、ワルターがパリ音楽院管弦楽団を振った〃幻想〃を、不謹慎にも寝ころんで聞いていた。

それまで私は、〃幻想〃といえばカラヤンがベル・フィルを振った演奏を最高だと感じていた。

ワルターの〃幻想〃を初めて聴いた時も、愚演だと思った。素直にそう思った。

寝ころんでいる私の耳にワルターのくせのある演奏が流れて来る。

第二楽章。何と遅々とした演奏だ、と私は感じ、こんな遅くして何を言いたいのだろう、とぼんやり考えていた。第二楽章も結尾近くだ。何を思ったのか、急にワルターは、ものすごいアッチェレランドをかける。曲は急激な加速につられ、速さの頂点で音が消えた。

その時、私はふっと何かを感じ、ニタリと笑った。笑った瞬間、ワルターが死の直前に私が聞いているこのレコードに耳を傾け、ニタリと微苦笑している顔が脳裏をかすめた。ワルターの顔を思い出したのは、彼が世の悪評にもかかわらず、死の直前までこのレコードを愛聴していたと聞いていたからだろう。

後になって私は一寸考えてみた。

私は何故あの時ニタリと笑い、老ワルターが微苦笑している顔を思ったのだろうか？

すんなりと答えは出て来た。

老ワルターの微苦笑は正統に対する反骨の表現であり、私のニタリは、人間ワルターを遂に見たぞ、という意味を持っていたのだ。

おかしく思われるだろうが、私はワルターを神様の様に、言いすぎだとすれば、手の届かぬところのスターを見るような眼でワルターをみていた。

というのも、そもそも私がワルター、ワルターと騒ぎ出したきっかけは、彼のブラームスの交響曲を聞いて、その演奏の中にヒューマニズムを実感したからである。

当時、私はデカダンスとかニヒリズムとかいう気分に満たされていた。従ってそんな状態の十七・八の少年にとって、露骨にヒューマニズムを押し売りするような作家達を侮けっていたのは当然と言ってよい。

が、ワルターによってヒューマニズムは実感として私の中に溶け込んで来た。以来、ワルターは神聖にして犯すべからざる存在として在った。

人はまず出生と共に世界に投げ出され、次に世界を理念化し理想に向かう。そして次には世界を素直に受けとめ消化し、個人の現実に立ち向かって生きてゆく、というのが私の持論である。

私は今まさにその第三段階を生きつつある。とすれば、私の内なるワルターは理想に向かっている存在として位置づけざるを得ない。従ってそろそろワルターなど、どうでもよくなった。神棚に奉っておくだけの存在になりつつあった。

ところがである。

幻想交響曲を聞いて私は生身のワルターを感じた。自我を張り、俺は俺の思いどうり演奏するのだ、文句があるか！と言っているワルターを感じた。私のニタリはそれだった。

私は今嬉しさで一杯である。

ワルターを神棚の上からもう一度私の机の上に置いて語ろう、そう思っている。

以　上

ワルター協会員各位　殿

[redacted]

「ワルターとの出会い」

（大阪府吹田市）　[redacted]

僕のワルターとの出会いは、クラシック音楽との出会いであるとも言えます。そのころ家にあった唯一のクラシック・レコードは、ベートーヴェンの第五交響曲でした。家にはステレオ装置はなく、電蓄があっただけです。友だちはステレオ装置でベートーヴェンを聞いているのに僕だけが電蓄で、それもSP盤で聞いていたのです。始めは全曲を聞くのが退屈でよく第二楽章を飛ばして聞いたものでした。しかし全曲を聞くようになると、曲の途中でレコードを裏がえすのが、めんどうでいやでたまらなくなってきたのでした。父に言うと「ステレオは夏休みまで待て。あのレコードは、父さんが若いころ大丸百貨店で予約販売した時に買ったもので当時は、大へんな話題をもたらしたレコードなんだ。」と僕に話したのを覚えています。

この曲を全曲聞き始めたころ、何が何んだかさっぱり判らなかった。ただ聞いていた時間が、むだと感じず、何かが頭の中にのこっていたのでした。僕はこのレコードが切っ掛けでワルターの演奏を聞くようになったのです。FMでワルター＝コロムビアSOのレコードが放送されると必死（眠けを堪えるので）で聞いたのを覚えています。長いこと、多く聞いているうちにSP盤で感じたものが、FMでのステレオ盤では感じられないのです。そんなある日FMでモノラル盤が放送されたのです。この演奏にはSP盤で感じたものが、感じられたのでした。今から考えると、若々しさ、力強さであったのかもしれません。それ以来ワルターの力量は、ステレオ盤よりモノラル盤の方が良く判るのではないかと思いだしたのでした。そうして聞くうちに、一部はステレオ盤の方が良いという結果を得たのでした。

このほどCBS・ソニーから非売品で僕をワルター・ファン、クラシック・ファンにした「第五交響曲」がLP盤に復活して出ました。僕は、大きな期待を持って、そのレコードに針を降すと、そこから聞こえてきたのは、たしかにSP盤の第五番でした。しかし僕は期待を裏切られた感じでした。LP盤からは、昔の面影が浮び上がってこなかったのでした。

僕は何年ぶりかでSP盤を聞きました。それはLP盤とは比べることのできない音であるけれども僕の昔の面影があったのです。そのころいやだと思っていたレコードの裏がえしなどの中に、何もわからずただいっしょうけんめいに聞いている自分を見たのでした。そして、彼の回想録「主題と変奏」の序の終わりに書いてあった文を思いだしたのでした。

「世界史的な活動はどれほど重要な人間によるものでも、やはり時間に隷属している。それに比べて、創造的精神の作品はいつまでも消えないのである。ナポレオンは死んだ ― だがベートーヴェンは生きている。」

吾が家のオーディオ改良

（東京都小金井市）　[redacted]

七月某日、私宅へ山崎仙人（オーディオの山崎謙氏）が舞いおり

てきました。別に私の家内の白いスネを見て雲の上から落ちてきたわけではありません。取材にみえたわけですが、二日間を通して色々有益な事を教わりましたのでお知らせしましょう。

私は音楽を聴く事には人一倍興味をもってもオーディオの方にはほとんど関心はありませんでした。それでレコ芸やLP手帳、ステ芸等の音楽雑誌を読んでもレコードの月評や作曲家、演奏家の記事には目を通してもオーディオの記事はとばしてほとんど読んでいません。そういう状態ですからオーディオマニヤの人々には常識的な事も私は無知に等しい事を忌い知らされました。考えてみますと演奏の内容ばかり追求して音の方にはあまりにも薄情無関心であったのではないかという反省もあります。私の装置は安サラリー見合いの最低線のものです。所帯持はそう簡単に良いと判っていても高価な物は買えません。音が出れば最低のグレードの処で我慢しなければなりません。組合せもパイオニアとかトリオ、ソニーといった常道のコンポではなく、真先に選んだのが辛うじて市販されていた可変速付78回転のついたビクターのプレーヤーでした（他のメーカーのは78回転のついたプレーヤーはもう既に姿を消していました）。SPレコードが演奏出来るという事で一も二もなくこれに決めたわけです。このプレーヤーは単体のプリメインアンプが組込める様になっており、ついでにそのアンプも対で求めました。そして半年位後で足したのがスピーカーというわけで、計画的な装置の組合せではないのです。演奏もSPの固い無反響の音質をめざしたのは勿論ですが最近に至り「音の骨格」を追求するの余り音の肉付（響き）を忘れてしまっているのではないかという反省から山崎仙人の神通力をもってSPとLPの融和を計ろうという事になったのです。

まず、私の持っている装置ではグレードアップ等は望めない普及品でオーディオの見知からは手のつけ様がないという事でした。音響的ハイファイを目的にはアンプもプレーヤー、スピーカーも機能的にいじれないとなればどうしたら良いか？　そこで山崎仙人の仙術パターンで音楽的ハイファイ音を目標とする事で作業にとりかゝりました。

一、スピーカーボックスの補強

スピーカーシステムは箱の厚味が気に入って買ったクライスラー1aですが、それでもなお共振を防ぐ補強が必要との事で、箱の裏面に鉛板による補強を行いました（LP手帖73年5月号一二〇頁参照）。鉛板での補強場所は箱の裏面をコツコツと拳骨でたゝいて定めるわけで丁度病院で内科の医師が患者の胸を打診するのとそっくりです。

二、プレーヤーからアンプへのリード線の補強

MM型やMC型カートリッジの微弱な出力電気をアンプに送るには出来るだけ電気抵抗が少なくて、歪なく正しい形で信号を送れる電導線が必要で、プレーヤーについていた既製の線を山崎仙人がわざわざ特注で作らせたという同軸ケーブルに取り換えました。なおこの時プレーヤー裏のカートリッジシール線の集合所が裸でしたのでアルミ板でカバーボックスを作ってこれを覆い外磁波を防ぐ様にするとともに併せてアース線を独立させアンプアースへ継ぎ込みました。

三、カートリッジシェルのアーム差込口の磨き

これはカートリッジの〇・〇五～五ミリボルトという極微電力をアンプに送り込むにはとにかく「ロス」を少くする事が第一でシェル、アームの接続部も酸化覆膜やサビがあっては大きなロスとなり音量、音質に影響する事大という論理によるもので、山崎仙人に言

わせるとこれらの接触部分は皆金メッキをして電導を良くすると共にサビを無くさなければならないという事です。残念ながら市販のシェルは金メッキしてあるのはあまり見かけませんね。この時はズボンでシェル根元の四つのボチをこすり磨いてピカピカに輝やかせた上でアームにとりつけました。この事はもう数年前から山崎仙人が雑誌に書いている相ですがオーディオにうとい私は全く初耳で言われてみれば理の当然で成程と感心すると共にこれは良い事を教わったと思いました。

四、カートリッジはMC型を使うこと

MM型ですと重いマグネットを動かす方式でどうしても音が鈍重になりがちで過度特性の点でもエコー効果を生みやすい。カッターヘッド自体がMCタイプでありその再生はやはり同方式のMC型で音を拾い出す方が音の立上りも良く明瞭であるとの事。又針圧は指定のMAXかける方が音も良く盤も痛めないと強調されました。

五、そ　の　他

この他にもプレーヤーを鉛板で補強する。アンプからスピーカーへのリード線を30軸以上の太い線にする等の改良は、プレーヤーが子供が居る為振動しやすい事を考慮し元のサスペンスのまゝとし、又スピーカーへのリード線もまあまあという事でそのまゝとしました。又これも普通気付かぬ事ですがハンダーも鉛よりも錫の多いハンダーの方が電気抵抗も少なく仕上りもきれいとの事で、実にていねいな作業にはホトホト感心しました。

さて以上で作業を終り、スピーカーの置き方を少し変えテストレコードで中音、高音のバランスを調整してレコードのプレーにかゝりました。

まずワルター、コロムビア響の田園。これは日本コロムビア盤で古いステレオ録音ですがゆったりしたテンポで音のバランスが聴き別けやすいという事で選んだのですが、改良前より音が豊かに響きスピーカーに余裕がでたという感じになりました。勿論低音、高音も伸びてバランスが良くなり、又オーケストラのスケール感アップと相俟って管絃楽を聴く興味というものが倍増しました。

次に復刻盤ではワルター、ウィーンの軍隊（BWS一〇〇二）をかけてみました。カートリッジはオルトフォンのモノ用です。いや驚きましたね。SPにこんな音が入ってたのかとさすがの山崎仙人も驚嘆しました。毒舌でなる仙人が驚いたのですからゆかいではありませんか。艶やかなウィーンの絃の合奏は天国的なオルガンの様な響きで聴えてきます。そして音の切れの良い事！この効果が最大に出たのが四楽章のティンパニーの連打でしょう。まさに音が飛び出すという形容そのまゝに聴きわたります。残念ながら蓄音器では絶対に聴き出し得ない実奏さながらの生々しさです。私も蓄音器の音は好きです。特に声楽や器楽ではある意味では蓄音器の音は本物だと思います。しかし録音されている音を完全に再生させるには、やはり良いカートリッジで電気的に拾い上げるのが本当だろうなあとこの音を聴きながら感じいりました。

次にSPレコードはヌブーのヴァイオリン演奏をかけました。カートリッジはデンオンのSP用です。これまた音の切込みするどく正に眼前で弾いてるヴァイオリンがうなりを発している感じです。山崎仙人も思わず聴きほれたと言いました。SPのこの音を聴いていたら今のマルチだ四チャンネルだと騒いでいる録音技術は一たいどれだけ進歩したのだろうか？……と疑問に思われてきました。勿論LPとSPではそれぞれ音質調整をして聴きました。

今までの試聴では実にけっこうづくめでしたが、後日声楽を聴い

てみました。私はカルーソが好きですが、人の声の再生はハイファイである程難かしいもので特にカルーソは声質上鼻づまり声になりやすい問題を含んでいます。これら声楽では改良前よりも甘くなった感じですのでアンプ、スピーカーの音質バランスを多少調整して私の好みとして固目にもってゆく必要がありました。しかしヴァイオリン等絃は、はっきりと効果が上った事は間違いありません。やはり一番その音に驚いたのはワルター、ウィーンのレコードで再生さえ適性が合えばテープ録音そこのけのすばらしい音質で音楽が味わえるという事が判りＳＰレコードの録音の優秀性に改めて感心した次第です。

前にＳＰ復刻盤の聴き方についてててっとり早くカートリッジとアンプの高低音の操作について経験的な事を皆さんに御報告しましたが、今回更に一歩前進して耳で確め得た補強等による効果をお知らせし皆さんの御参考になればと思います。なお今回のグレードアップについては山崎仙人の他ＣＢＳソニー京須氏、ＨＲ愛好クラブ間宮氏、日本ワルター協会菅氏の御協力を得ました事を感謝致しております。

＊　＊　＊　＊　＊

会報六号の宮沢さんのＳＰ復刻盤の聴き方に関するスクラッチ・ノイズをとるヒントは大変面白く拝見しました。実はそのアイデアは私も考えていました。色の補色と同じ原理で、ある方面では利用されています。レコード内周での音の歪（トラッキングエラー）を無くす為に逆の歪にカッティングし再生時には正常に戻す方法で一頃ＲＣＡビクターが大宣伝したダイナグルーヴ・システムがこれです。処でＳＰのノイズは低音、中音、高音と広い範囲に色々なものが入っておりＳＰの材質で皆分布帯が違います。ですから当然専門家であるメーカーがこの方法を採用出来ないでいるのは非常に難かしいからではないでしょうか。それで普通は大部分のノイズ成分を占める高音部をカットしてそのバランス上低音も切って一見聴きやすい状態に操作の上商品化していたわけです。処がこう言う復刻盤はどうも音色が冴えない音楽に力が無い等元のＳＰと違うのですね。結局ＳＰは六千ＨＺ位しか高い方は録音されてないという定説で、七～八千ＨＺ以上をカットしてノイズを除いても音質上問題ないとされていたのが、最近の測定で一万ＨＺ以上までＳＰも音が録音されている事が判り、又悪い事にこの周波帯にノイズも同居している事から高音のノイズカットの弊害がでていたわけで、その原因が解明されたわけです。従って最近の各社の新たな復刻盤は高音ノイズをある程度残し音色を生かす方向にある事皆さんも御存知の通りです。宮沢さんは夏休みにでも逆ノイズでスクラッチ・ノイズを打消す方法を実験してみるとの事ですがいかゞでしたでしょうか？　成果を教えて欲しいものです。

最後に山崎仙人の貴重な言葉を皆さんにお伝えしましょう。

「高級品という高価な機械ほど使いこなしが難かしいものでその性能を発揮出来ないでいるものが多い。普及品でもその能力を一ばいに引出せば高級品よりも音楽的に良い音がする。要はその機械を使いこなすという事である。」

「珠玲仁雅」

◎昨年秋、「ブルーノ・ワルター」（レコードによる演奏の歩み）を上梓なさった宇野功芳氏は、此の度「モーツァルトとブルックナー」の執筆を完成され、帰徳書房（東京都千代田区神田富山町一八、西川ビル内一号室）から刊行なさいました。氏のモーツァルト観、ブルックナー観のみならず、ワルターをはじめ、多くの指揮者の解釈・演奏評が読みごたえのあるものとなっています。御一読をおすすめ致します。

◎今年九月十五日午後十一時〇五分ＮＨＫ・ＦＭ「音楽夜話」で、「ワルターの変貌」と題する、宇野功芳氏のお話が放送されましたが、其の際にシンフォニー・オヴ・ヂ・エアとの協演に依る「エロイカ」の第四楽章、ウィーン・フィルの「軍隊」の第一楽章、及びロイアル・フィルの「ジーグフリードの牧歌」（一九二四年版、旧吹込）の最初の部分の演奏も放送されました。

◎今年九月から十月に亘って、ＣＢＳソニーから「ワルター不滅の一〇〇〇」というシリーズで、ワルターの一九四一年から一九五六年迄のモノーラル録音（ＳＰ録音をも含む）による三十一枚（特典盤を含む）のＬＰが発行されました。但し、ロッテ・レーマンとの協演による「詩人の恋」「女の愛と生涯」、また「魔笛」「フィガロ」「ドン・ジョヴァンニ」以外のアリアや歌曲における、リリー・ポンス、エツィオ・ピンツァ、エリノア・スティーバー、ジョージ・ロンドンとの協演、デジ・ハルバンとの協演によるマーラーの「若き日の歌」よりの八曲、ベートーヴェンの「第九」の第四楽章の最初の版、ブラームスの「ドイツ・レクィエム」、モーツァルトの「レクィエム」などが割愛されていますが、その中ＳＯＮＣシリーズで現役であるものもあり、アメリカのＣＢＳ・コロムビアのオディッセイ・シリーズで入手可能なものもあるので、格別不便を感じませんが、デジ・ハルバンのマーラーの歌曲だけは、名演であるにも不拘、現役盤がありません。これだけは無念至極です。

尚、メンデルスゾーンの「スケルツォ」、モーツァルトの「コジ・ファン・トゥッテ」序曲、及び特典盤の「ジュピター」のＬＰ化に当っては、協会としても協力を致しました。

◎ブルーノ・ワルターの未発売録音のＬＰ化が、最近活潑化して参った事は御同慶の至りです。

コロムビアからは、ブゾーニのＶ協奏曲（独奏アドルフ・ブッシュ、アムステルダム・コンツェルトヘボー）が発売されました。（ＤＸＭ一七七）。これは私達のＢＷＳ一〇〇五と同じ演奏ですが、音に迫力が無く、ワルターが引込んで聞えるのは残念です。

東芝エンジェルからは、マーラーの「第九」、「第五」のアダージェット、ワーグナーの「ジーグフリートの牧歌」（何れもＶＰＯ）（ＧＲ二二五五―六）が発売されました。もとのエレクトローラ「ダ・カーポ」シリーズでは、「牧歌」の代りに、マーラーの「亡き児を偲ぶ歌」（フェリアー）が入っています。ＧＲシリーズで、「牧歌」が入れられたのは大サーヴィスです。東芝エンジェルからモーツァルトの第三十九番交響曲、「ティトス帝の慈悲」「ジャルディニェラ」「フィガロの結婚」序曲、及び独逸舞曲が発売される事を期待するものです。（何れもダ・カーポで発売中。）

尚、近日中に「軍隊」と「奇蹟」が、GRシリーズで発売されます。私達のBWS一〇〇二と比較して〝音〟がどの程度に録音されているか？　期待と不安で胸が一杯になります。

◎雑誌「音楽現代」十月号は、ブルーノ・ワルター特輯号でした。地方の会員で、まだこの雑誌の存在を御存じない方の為に、発行所の所在地等をお知らせ致します。「芸術現代社」（〒一六二　東京都新宿区東五軒町二五）定価三九〇円、送料五〇円。

さて、この音楽現代十月号に、川上剛太郎氏は「ワルターの未発表録音」を寄稿なさいましたが、この玉稿はこの特輯号の一大圧巻でした。御必読下さい。また、筆者もワルターのディスコグラフィーを寄稿致しましたが、宇野功芳氏、大木正興氏、筆者の三人によるワルターの優秀盤選定も行なわれました。

◎ワルターのSPレコードの録音日に関するデータが僅かながら入手出来ましたのでお知らせ致します。協会発行のディスコグラフィーに宜敷御訂正御加筆下さいます様、お願い申し上げます。

ハイドン　交響曲第九十六番「奇蹟」　一九三七年五月五日
　　交響曲第百番「軍隊」　一九三八年一月十日
マーラー　交響曲第五番アダージェット　一九三八年一月一五日

これにより、ワルターのウィーンに於ける最後の録音（一九三八年）は、マーラーの第九（一月十六日）であった事が判明しました。

「軍隊」の録音日に就いては、従来アメリカの音楽評論家ロバート・C・マーシュの説を採り、「一九三七年」と記録して居りましたが、「ジュピター」（一九三八年一月十一日）の録音の前日、一月十日の録音である事が判りました。従って、2VH七千シリーズ（ディスコグラフィーのマトリックス番号を御参照下さい。）は、一九三八年一月に始まった事の可能性が強くなり、「軍隊」の直前に録音されたブラームスの「大学祝典序曲」とJ・シュトラウスの「皇帝円舞曲」の録音も、一九三七年十二月よりも一九三八年一月の公算が極めて大となって参りました。この二曲の録音年を一九三七年としたのは、マーシュが「軍隊」の録音年を一九三七年とした事に拠るので、「軍隊」の録音日が判明した以上、この二曲も一九三八年一月の録音と考える方が自然であり、妥当性が強いと思われます。

◎本年十月九日号の「報知新聞」まい・さろん欄に、私達の協会の紹介記事が掲載されました。

◎米国ワルター協会では今回左記の二枚のレコードを刊行致しました。御希望の方には、実費で斡旋致します（一枚二千四百円）。尚、梱包料は百円、小包料は、都区内百五十円、第一地帯二百円、第二地帯三百円、第三地帯四百円、かけがえのないレコードですから書留小包で送りますので、書留料百円、御加算下さい。

BWS七一六　メンデルスゾーン　V協奏曲（ミルシュタイン）
　　シューマン　交響曲第一番「春」
　　ワルター指揮NYフィル（共に一九四五年）
BWS七一七　モーツァルトP協奏曲第二二番変ホ調調K482
　　シュナーベル、ワルター指揮NYフィル
　　同　P協奏曲第二三番イ長調K488
　　シュナーベル、ロジンスキー指揮NYフィル

尚、枚数に限りがありますので、往復葉書でお問合せの上、御送金下さい。

◎エリザベート・シューマンとワルターの親交は深く、度々ワルターの伴奏でE・シューマンは歌っていたそうですが（写真も残っています）、録音はおろか、資料さえ未発見でしたが、此の度川上剛太郎氏の御努力に依り、其の一端が判明致しました。

一九四六年夏のエディンバラ音楽祭
「シューベルト・アーベント」
　独唱エリザベート・シューマン、伴奏ブルーノ・ワルター

残念乍ら、月日と曲目の詳細は未だに不明ですが、若し御存じの会員の方がおいでになりましたら、何卒御一報下さい。

◎本号には、[redacted]氏の玉稿を戴き、また宇野功芳氏、川上剛太郎氏、[redacted]氏から貴重な資料を戴きました。厚く御礼申上げます。ワルターの芸術、人格に対する論文、評論等の御投稿を鶴首して待っております。

「ワルターの演奏会記録」（追加）

○　ニューヨーク・フィルハーモニック管弦楽団

一九四八・二・一九
ダグラス・ムーア　交響曲　第二番　イ長調
ベートーヴェン　P協奏曲第五番「皇帝」（独奏R・ゼルキン）
R・シュトラウス　交響詩「ドン・キホーテ」

一九四八・三・一〇／一一／一三
ベートーヴェン　「レオノーレ」序曲　第三番
同　交響曲　第八番　ヘ長調
同　V協奏曲ニ長調（独奏、エリカ・モリーニ）

一九四八・三・一七／一八
ベートーヴェン　交響曲　第四番　変ロ長調
同　三重協奏曲ハ長調
　（独奏者、コリリアーノ、ローズ、ヘンドル）
同　交響曲　第七番　イ長調

一九四八・四・一五／一六／一八（カーネギーホール）
ベートーヴェン　「ミサ・ソレムニス」
（エリノア・スティーバー、ナン・メリマン、ウィリアム・ハイン、ロレンツォ・アルヴァリー、ウエストミンスター合唱団）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

その後ワルターは数週間の休暇をとり、同年四月二十日にニューヨークを出発して、ウイーンへおもむきました。そうして、ウイーン・フィルの指揮棒を取りましたが、これは一九三八年二月以来、十年ぶりのウィーン出演でした。

一九四八・五・六
マーラー　交響曲第二番「復活」（独唱者名不明）
　その他の曲目は不明です。

一九四八・五・？　（ラジオで中継放送された由）
ブルックナー　「テ・デウム」
ベートーヴェン　交響曲第九番ニ短調
　（マリア・チェボタ―リ、ロルナ・シドニー、
　ワルター・ルードヴィヒ、ハンス・ホッター）

以上の資料を提供して下さったのは、川上剛太郎氏です。